

第 62 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 20 年 12 月 13 日 (土)
午後 3 時～
会 場 新潟グランドホテル
波光の間

一 般 演 題

1 妊娠 16 週に硬便によって発症したと考えられた直腸穿孔の 1 例

木戸 知紀・川原聖佳子・野上 仁
丸山 聡・谷 達夫・飯合 恒夫
高山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

症例は 32 歳, 女性. 妊娠 16 週. 腹痛で発症し, 切迫早産疑いの診断で入院・加療されていたが改善なく, 加療目的に当院に緊急搬送された. 汎発性腹膜炎の所見を認め, 白血球・CRP の上昇も認めた. 切迫早産の所見はなく, 胎児心拍に異常もなかった. CT 検査を施行し, 直腸穿孔・汎発性腹膜炎と診断し緊急手術を施行した. 直腸の穿孔が疑われたが, 腫大した子宮のため確認は困難で, 穿孔部の閉鎖は不可能であった. 洗浄・ドレナージ, 結腸切開による硬便の摘出, 横行結腸人工肛門造設術を施行した. 帰室後, 破水し早期流産となった. 術後, 腹腔内に膿瘍形成を繰り返したものの, 切開・排膿, ドレーン挿入にて改善し, 保存的治療で穿孔部は閉鎖し, 46 病日退院となった. 胎児への被曝線量が 50mGy 未満 (腹部・骨盤部 CT 検査は 28.9mGy) では胎児への影響はないとされており, 本症例のように汎発性腹膜炎の疑う症例では腹部・骨盤部 CT 検査は躊躇せず施

行すべきと考えられた.

2 腹腔鏡下切除後に骨転移, リンパ節転移を来した大腸 SM 癌の 1 例

蛭川 浩史・嶋村 和彦・渡辺 隆興
多田 哲也

立川総合病院外科

症例は 76 歳, 女性. 平成 15 年, 直腸 Rs の Ip 型の早期癌に対し内視鏡的切除術を施行. carcinoma in adenoma, pSM と診断された. 追加腸切除を勧めたが, 希望されず経過観察されていた. 平成 17 年, 内視鏡検査で同部位に隆起性病変を認め再発と診断, 腹腔鏡下直腸前方切除術を行った. 切除標本の病理では, pSM (2.2mm), ly0, v0, n (-), fStage I と診断された. 術後補助化学療法は行われなかった. 平成 19 年に腰痛が出現. 腹部 CT で仙骨の骨破壊像と吻合部近傍の腸間膜内に腫大したリンパ節を認め直腸癌の転移と診断された. 仙骨へ放射線照射を行い疼痛は改善. その後, うつ病を発病, 現在他院に入院中である. 自験例は, 再発時に全身転移をきたしていた可能性がある. 大腸 sm 癌を内視鏡的切除され追加腸切除がなされず経過観察され, 局所再発した症例では, 再発巣の深達度によらず全身転移をきたしている可能性を考慮すべきではないかと考えられた.

3 当科における Crohn 病に対する IFX スケジュール投与と IFX・免疫調節剤併用療法の比較検討

相場 恒男・杉村 一仁・濱 勇
河久 順志・横尾 健・米山 靖
和栗 暢夫・古川 浩一・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院

【背景】2007 年 Infliximab と AZA/6MP の同時投与例 9 例に Hepatosplenic T-cell Lymphoma の発症が報告され, 長期にわたる Infliximab と AZA/6MP の同時投与に関しての安全性に疑念が呈されている.